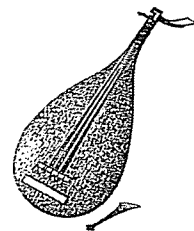


日本と朝鮮の仏教伝来

井上 秀雄



1

韓国の史跡を初めて訪れたとき、いろいろな驚きに出合ったが、なかでも仏教寺院には、強くひかれた。まず、寺院のあり場所が、谷間の奥深くにあり、霊山や鎮山に抱かれた景勝の地であった。そして寺院内には、三神堂・七星堂・山神堂など、山神を祠る堂宇があり、まさに神仏習合である。

韓国の仏教は、朝鮮王朝の初期（一三九二年）から、儒教徒による激しい廃仏毀釈によって、都市の寺院は壊

滅し、辛うじて山間の寺院が残った。朝鮮王朝時代には、男性優位の社会が確立し、これをサポートする思想として儒教、とくに朱子学が盛んに行われた。しかし、仏教は婦人層の信仰をえて、シャーマニズム的な在地信仰と結び付き、今日まで続いている。

男性は儒教を、女性には仏教を信仰するという変わった信仰形態が朝鮮王朝時代に成立し、儒教の盛んなどころほど、この傾向が明瞭に見られると言われてきた。私が初めて韓国を訪れた一九六〇年代以後でも、この傾向が随所に見られた。ソウルの男性の知識人たちは、女性の

信仰を巫俗とみて、信仰には入らないものと言う人が多かった。確かにそのころの農村には、門前や屋根に白旗を掲げた巫女の家がかなり見られた。このような巫女は沖繩の巫女や現代日本のある種の宗教にも見られるように、数人の信者を対象に、占いで治療したり、生活指導などをしていた。

韓国では高山の頂上近くの岩陰に庵を結び、一人ないしは二、三人で、読経生活をしている人達に出会うことがよくある。また、規模の小さい寺院もあって、僧侶一人が修行するとともに、訪れる婦人たちを個人的に、あるいは二、三人単位で、静かに説教しているところもある。山城などの現地調査で高山に登ると、このような婦人の仏教徒に出会うことが少なくない。この人たちはけもの道のような細い山道を、馴れた足取りで登っていく。法要の時でもなければ、ほとんどが一人で、山頂の岩窟の庵に登っていくのである。日本の山岳仏教のように、山伏姿も勇ましく、隊伍を組んで肅々と霊山に登る姿とは対照的に、韓国の婦人たちは、日常生活の一部として、山に登り、寺院を訪れるのである。日本の山岳仏教は、

俗塵を払い、日常生活と断絶した信仰生活に入るのに対して、韓国の仏教徒は、日常生活のなかに信仰生活が同居しているといつてよいようである。

旅人の目に映った韓国人の信仰形態の一端から、ただちに韓国仏教の神髄をいいあてようとするのではない。ただ、これを見ながら、古代朝鮮で見られる、断片的な信仰の記録に、どこか通ずるところがあるように思われたのである。

2

仏教はインドの土俗信仰の中から生まれ、紀元前五世紀ころ釈迦によって説かれた宗教である。教義には、インド北部の地域的な信仰の領域を越えて、他の地域にも通ずる世界宗教の要素が強かった。そのことから、インド諸地域の国王や大商人の支持を得て、インド各地に広がった。仏教はその後、南方と北方とに広がり、その性格も種々分化・変容しながらアジア各地に広がっていった。

この仏教が、北進して西域に入り、中国・朝鮮・日本

へと伝えられてくるが、その伝来の形式には、それぞれの地域により、かなり相違が見られる。このような相違を通じて、それぞれの仏教の果たした役割を知ることができる。また、それぞれの地域の仏教もおのずから異なるものであり、仏教そのものも種々変質していった。このような各地域での仏教の変化を、従来のように、教義や宗教儀礼など仏教内部の変化、発展に注目するだけでなく、それぞれの地域における、宗教活動の中で仏教の位置やその社会での機能などにも目を向ける必要がある。また、従来の思想史のように、特定の高僧たちの活動だけではなく、これに反応する住民たちの立場からも、考えてみる必要がある。

このような疑問の生じてきたのは、前に述べたような、韓国旅行で、たまたま出合った仏教徒の姿が、日本の場合とあまりにも大きな差があるからである。仏教は末法の世に入っただけで千年近くになるので、同じく仏教といっても、このように大きな相違が生じたのであろうか。このような疑問を持ちながら、古代の朝鮮と日本の文化を比較するうちに、朝鮮三国の仏教伝来と、大和王朝で

の仏教伝来とは、形式が異なり、その信仰的意味や社会的機能も異なっていることに気付いた。もともと、大和王朝の場合は、仏教の初伝とか公伝とかについては、その正史である『日本書紀』には、特に記述していない。現在の研究者のあいだでは、仏教の公伝といわれるものが、『日本書紀』の欽明紀一三年（五五二）冬一〇月の条とされている。この記事を仏教の初伝としたのは、一三一年七月に東大寺の凝然の著した『三国仏法伝通縁起』中巻華嚴宗の条にはじまる。その記事の要旨は次のようである。

日本に仏教が初めて伝えられた年代については、二説がある。一つは、むかし新羅の学生が記録した「大安寺審祥大徳記」には、宣化天皇三年戊午年（五三八）二月二日に、百済国から、仏教が伝来したという。他は延喜一四年甲戌（七九四）に記述した「東大寺圓超所記」には、欽明天皇一三年に、仏教が初めて伝わったとしている。この両説のうち、後者を仏法の初伝とする。その理由は、宣化天皇三年に仏法が伝わった

けれども、まだ仏法が広まったとはいえず、これを初伝とするわけにはいかない。欽明天皇一三年に仏法が伝わったことは、広く天下に知られている。それゆえ、多くの人たちは、この年を初伝としているのである。

この書によって、二つの仏教初伝の説があることが明示された。そのうち、宣化三年説を排除して、欽明一三年説をとっている。宣化三年説が排除された理由は、「東大寺圓超所記」を正当な記録としている。その理由は、宣化三年の説は、仮にこの時に仏教が伝わったとしても、仏教が広まっておらず、定着していなかったもので、これをとらなかつたとしている。これによれば、『三国仏法伝通縁起』の著者は、仏法が初めて伝えられたことと、仏教がある程度流布し、日本に定着する、いわば、公認の時期とを混同しているように思われる。欽明一三年説は、広く天下に知られているからこの年をとるというものである。このような発想法は、仏教初伝にたいしてだけでなく、日本の多くの事象で見られる考え方である。仏教の初伝の事実を追求するのではなく、事実の有無に

かわらず、天下に広く知られている説が正しいというのである。この考え方を突き詰めれば、史実よりも有力な学説に従うことが良い、と言うことになるであろう。『三国仏法伝通縁起』は、日本の歴史研究の方法やその目的を考えるのに、重要な材料でもある。多くの学者が賛意を示している学説でも、必ずしも史実を踏まえたものでない場合がある。また、最初にその学説を提唱した人は、それなりの根拠があつたとしても、これを受け継いだ研究者が、その根拠を正確に後世に伝えていてとは限らない。このように、日本史の定説の中には、正史の所伝とか、勅撰の書物や政治権力者など支配者の記録を重視する傾向がある。しかし、ここでは仏教伝来の文献的な問題を、学説支持者の多少で考えるのではなく、学説を生み出してきた原典の記事を、今一度見直すことから始めたい。

3

仏教伝来については種々の問題があるが、まず、いつ日本に仏教が入ってきたかを、文献によって、確かめて

みたい。また、仏教の伝来とは、どのようなことを言うのかをもあわせて考えてみたい。

仏教初伝の年次に関する『三国仏法伝通縁起』には、先に述べたように、二説がある。そのうち、欽明一三年の仏教初伝説は、勅撰の『華嚴宗并因明章疏目錄』の序文によったものであるとしている。この序文の仏教初伝説は、この書物が勅撰であるためか、正史である『日本書紀』の記事によっている。延喜年間（九〇一―九三三）ころの華嚴学者たちは、概ねこの説をとっていたという。このことは、平安末期に編纂された『扶桑略記』などにも継承されている。

これに対して「大安寺審祥大徳記」の宣化三年戊午の仏法初伝説は、その年次や月日からみて、『上宮聖徳法王帝説』の欽明朝の戊午年説によったものであろう。『上宮聖徳法王帝説』は、七世紀中葉以降の古い史料を収集したものといわれ、古代の貴重な史料とされてきた。ここに示された欽明朝の戊午年説は、『日本書紀』と異なる年表によるものである。七四七年編纂の『元興寺伽藍縁起并流記資材帳』では、その年表を使って、欽明七年

戊午年説をとり、八二〇年に最澄が著した『顕戒論』などにうけつがれている。

仏教の初伝の年次については、この両説のほかいくつかの説があるが、現在では『上宮聖徳法王帝説』の説が有力になっている。仏教初伝の異伝記事では、『扶桑略記』巻三欽明天皇一三年条があり、それには、

繼体天皇一六年（五三二）に司馬達止が、草堂に仏像を安置し、仏教に帰依し、仏像を礼拝した

といっている。

仏教の初伝に関して、どうしても避けて通れない問題がここにある。それは『日本書紀』欽明天皇六年秋九月の条である。『日本書紀』には、このころ大和王朝と百済王朝とは、使者の往来が頻繁で、秋九月にも、百済が任那に使者を派遣し、呉の財宝を贈ったとある。これに続いて、次のような記事が見られる。

是の月、百済王朝では、一丈六尺もの大きな仏像を

作った。その造像の願文に、「きくところによれば、

一丈六尺の大きな仏像を作ると、大変大きな功德があるということです。そこでいま、仏像を敬い作りました。この功德をもって、どうか天皇には、勝れた人徳をえられて、天皇の支配しておられるみやけの国（百済・任那諸国）とともに、仏の福を得ようと思います。また、天下の一切の衆生が、みな解脱できるように、祈願しています。そのために、この大仏を作るのです。」といってきた。

この記事によれば、仏像や教典を、百済王朝からもらったわけではないが、仏教についての理念や儀礼などについては、詳細に語られている。このことが、仏教初伝には係わりないとするわけにはいかなかったのでなかろうか。この点については、後に一三年冬一〇月条と比較・検討するが、今一つ重要なことは、百済王朝との使節の交流の頻繁な中で、百済での造像記事が伝えられていることである。百済側の報告によれば、この時期は百済が支配していた任那諸国に新羅の勢力が進出し、これを撃

退するために、大和王朝にしばしば使者を派遣し、上表文や呉の財宝などを贈っている時期である。そして、その反対給付として、大和王朝に対して、救援軍の派遣を求めている時期である。こういう中で、百済王朝で丈六の仏像を作り、信仰によって、大和王朝の関心を引くというのである。それゆえ、この願文をもたらしした百済の使者は、仏教の優れた功德について、当然、詳しく解説しているものと思われる。『日本書紀』では、百済王朝が、仏教の教義を大和王朝に伝えたことを重視し、これを欽明紀六年九月条に、記事として採用したのである。このことが、大和王朝の仏教伝来とされなかった理由は、どこにあるのであろうか。この記事と、欽明紀一三年冬一〇月の記事とを、比較・検討してみたい。

欽明紀一三年（五五二）は、同六年より百済にとって、厳しい国際情勢におかれた。百済聖王の軍は、前年、漢江流域を奪還したが、この年五月に、高句麗と新羅との連合軍によって、百済が窮地にたち、大和王朝に救援軍を要請してきた。しかし、大和王朝は一向に百済を救援する気配もなく、前年獲得した漢江流域も新羅に奪われ

ることになった。そのような中で、

同年一〇月、百済の聖王が使者を派遣し、釈迦の金銅仏一体と、若干の幡と天蓋とを献上してきた。そして、上表文をつけて、仏像を礼拝すると、優れた功德があるといってきた。「中略」遠く天竺からこの三韓にいたるまで、仏の教えに従い、これを尊び敬わないところはありません。そこで、百済王が、謹んで使者を派遣し、日本に仏教を伝え、流通させようと思ひます。そうすれば、仏が自分の法は東に伝わっていくだろうといわれたことを果たすことになります。「中略」そこで、天皇は群臣を集め、「西の隣国から献上してきた仏の顔は、きらきらしい。その美しさは、いまだかつて見たこともない。仏を敬うのが良いかどうか。」といわれた。蘇我大臣は、「西の諸国がみな仏法を礼拝しているのに、日本だけがそれに背くわけにいきません。」といった。物部大連たちは、「我が国の天皇は、天神地祇の百八十の神たちを祭っております。いまその風習を改めて、外国の神を、天皇が祭られると、

国神が怒るでしょう。」といった。そこで天皇は、「希望する蘇我の大臣に、試みに仏を祭らせなさい。」といわれた。(後略)

この記事が、有名な仏教公伝の記事である。この記事と、欽明紀六年の記事とを比較すると、仏教礼賛の上表文は、精粗の差はあっても、内容は同じである。異なっている点は、仏像や経典などを献上したこと、近隣諸国がすべて仏教を奉じていると伝えたことである。日本側も、天皇は仏像の美しさを称賛し、蘇我大臣は文化的に国際的地位を向上させるため、仏教を受け入れようというのである。天皇も大臣も、仏教を理解し、その教えに従おうとするものではない。仏教の内容については、再度にわたって、百済から教わったが、日本側の理解は、仏像の美しさや経典に見える新知識への憧れにとどまり、信仰としての仏教の理解には程遠いように思われる。仏教が初めて伝えられるときは、どの地方の国も、大和王朝の場合と大同小異であったのではなからうか。とくに、仏教が政治的に取り上げられ、公認するかどうか

の段階では、仏教に対する理解は、日本の場合と大同小異で、殆どなかったのではなからうか。従来の仏教初伝や公伝に対する考え方は、このような面が強かったのではなからうか。この点を確かめるため、次に朝鮮三国の仏教初伝や公伝の事情を見てみたい。まず日本にもっとも近い新羅の場合を比較の対象とした。

4

新羅の仏教公伝については、一一四五年編纂の『三国史記』巻四法興王一五年(五二八)条や、一二一五年編纂の『海東高僧伝』巻一流通曇始条・同流通阿道条や、一二八〇年代編纂の『三国遺事』巻三阿道基羅条・同原宗興法条や、八一八年建立の「慶州柏栗寺石幢記」などにみられる。これらはいずれも長文で、種々の問題を含んでいるが、ここでは『三国史記』法興王一五年条の記事を要約しながら次に紹介しておきたい。

一五年に、初めて仏法を行った。訥祇王代(四一七―四五八)に、高句麗の僧が、新羅に来て、仏教を伝え、

王女の病氣を治したという。炤知王代(四七八―五〇〇)に、阿道和尚が従者を連れて新羅にきたが、病氣でもないのに、突然死亡した。従者たちは、仏書を読み、説教をしたりしたので、ときどき仏教を信奉する者が現れた。

この時になって、法興王が仏教を盛んにしようとし、多くの貴族を集めて、仏教興隆のことを問うた。貴族たちはいっせいに、「いま、僧侶の姿を見ると、頭を剃って、子供の頭のようにです。また、黒衣という奇妙な服装をし、その議論は奇異なもので、常識では考えられません。いままし仏教の伝道を許すならば、おそらく後悔することになるでしょう。私達は例え重罪になっても、王の命令を奉ずるわけにいきません。」といった。

側近の異次頓だけは、「いま多くの貴族の言われることは、間違っています。従来のしきたりを越える人がいてこそ、いままでになかった事が起こるといいます。いま貴族たちは、仏教の大変奥深い話を聞いても、おそらく信ずることができないでしょう。」といいは

った。

王は、これらの議論をきいて、「多くの人々の議論は、非常に堅固で、論破することができない。おまえ一人が意見を異にしており、両方に従うわけにはいかない。」といい、役人に彼を連れ去らせた。

いよいよ処刑しようとしたとき、異次頓は、「私は仏法のために処刑されるのです。もし仏に神聖な霊力があるならば、私が死んだのちに、必ず異変が起こるでしょう。」といった。役人が異次頓の首を斬ると、その血は切り口からいつまでも吹きだし、その色は白くて、乳のようであった。多くの人たちは、この異変に驚きおそれて、再び仏教の興隆を妨げようとする者はあらわれなかった。

この説話記事から知られることは、新羅で僧侶が活躍し始めるのは、五世紀前半である。六世紀になると、かなりの新羅人たちは、僧侶の活動や仏教の内容を知ることになっていった。そこで王が仏教の伝道を公認するかどうかを論議させている。仏教に反対する貴族たちは、支

議しているに過ぎないのではなからうか。

5

日本と新羅との仏教の初伝や公伝についてかなり状況が違い、考え方が違っていたことが知られる。朝鮮三国で、中国に近い高句麗や百済の場合、どのような事情であつたかを、もつとも簡潔な表現の『三国史記』で見みたい。

高句麗第一七代小獸林王二年(三七二)夏六月に、秦王の符堅が使者および僧の順道を派遣し、仏像や経文を贈ってきた。

同王四年(三七四)に、僧の阿道がやってきた。
同王五年(三七五)春二月に、まず肖門寺を創建して、僧の順道を寺主とし、次いで伊弗蘭寺を創建して、僧の阿道を寺主とした。これが海東(朝鮮)における仏法の始まりである。

百濟第一五代枕流王元年(三八四)九月に、胡僧の摩羅難陀(まらなんだ)が晉からきたので、王は彼を

配者ないし行政官として、常識的な立場をとり、現状維持を主張した。これに対し、異次頓は信仰の立場から、仏教の公認を迫ろうとしている。立場の相違はあっても、それぞれ仏教に対する関心が深く、事実に対する正確な判断を持ち、自己の主張を貫こうとしているのが、この説話から十分伺い知ることができる。

これに対して先に挙げた欽明紀一三年一〇月条の、大和王朝の仏教伝来記事は、仏教に対する理解が極めて浅く、日本には、当時僧侶はいなかったらしく、仏教の信仰上の特徴や、その布教活動などについては、論争の対象にさえなっていない。この段階では、大和王朝の支配者たちは、信仰としての仏教については全くの無知で、仏像や幡・天蓋など、仏教文化の一端を知るにすぎなかったようである。換言すれば、当時の大和王朝では、仏教の是非を論ずるほど仏教と接触していなかった。そのようなところへ、百濟王朝が軍事的な危機に対応する救援軍の派遣を大和王朝に要請し、その代償として、仏教文化の一部を献上してきた。大和王朝では、このような政治意図の明瞭な仏教文化を受け入れるかどうかを論

宮殿内に迎え入れ、礼式をもって敬った。百濟の仏法は、この時からじまった。

同王二年(三八五)春一月に、仏寺を漢山に創建し、一〇人に僧の資格を与えた。

高句麗の場合は、三七一年に故国原王が百濟軍に討たれ、高句麗が危機に立ったとき、仏教による国家再建策をとったのである。形式的に言えば、仏法の始まりとは、高僧を招いて、仏教の布教の為の寺院を造ることが、仏教の始まりであるとしている。

これにたいして百濟は、高僧が王宮を訪れ、仏法の礼式に従ってこれを迎え入れたときが、仏法の始まりであるとしている。高句麗の場合と同様に、この高僧のために、寺院を建て、布教の便を計っており、さらに、一〇人もの僧をつくって、高僧の布教の補助としている。高句麗と百濟とは、仏教の始まる時期を、仏法の盛んな国から、高僧を招き、寺院を建てて、布教を始めることが仏教の始まりであるとしている。ただ、高句麗は寺院の建築が終わったときを仏法の始まりとしており、百濟

は高僧を宮中に迎え入れた時を仏法の始まりとしている。この点では小異があるが、この二国は、ほぼ同じ立場で、仏法の始まり、即ち、仏教の公伝をとらえている。新羅の場合は、高僧の伝道を初伝とし、貴族層が仏教の布教を公認した時点を、仏法の始まり、仏教公伝の時としている。これらに対して日本の場合は、仏法の盛んな地域から高僧を招くこともなく、その結果、国民への布教は行われず、仏教文化の一部がもたらされたことをもって、仏教の公伝としている。

おなじく仏教の始まりといっても、仏教を理解し、仏教の布教によって、国家・社会の発展を計ろうとする朝鮮三国の場合と、僧侶の存在さえも知らず、仏教の宗教的な活動に触れたことのない支配者たちが、奢侈文化の一つとして、仏教文化を導入した日本とは、同じ基準で考えるわけにはいかないのではなからうか。

歴史を研究する場合、それぞれの立場で学術用語を設定し、個別の事象を普遍化することは必要なことである。しかし、不用意に用語を設定したとき、かえって混乱を生み出すことになるのである。日本の歴史用語でもって、

外国の文化を理解しようとするとき、史実と異なった理解になることが少なくない。この仏教公伝という用語も、その内容が、小異にとどまらず、大きく異なる事例と言えるようである。

文化を異にする地域の比較研究は、この点一層慎重な配慮が必要である。例えば、中国で成立した城郭は、支配者を守る内城と住民を保護する外郭からなっている。このような城郭の形式は、周辺の諸民族に影響を与え、各地に城郭が造られるようになるが、受容する民族の要求の違いから、種々変容しながら伝わっていく。例えば、朝鮮では、内城が重視されず、支配者と住民とが、ともに外郭によって守られるようになっていく。とくに、全国に二〇〇近くも見られる山城では、内城は殆ど見られない。このような朝鮮の山城形式が、六六五年以後、日本で多く使われるようになる。これらは、いわゆる朝鮮式山城としてその跡が残っている。しかし、この朝鮮式山城は、朝鮮の山城とは異なり、住民保護を主要な目的とするものは少なく、殆どが、太宰府や国衙など、支配者の施設を守る内城の機能だけになっている。このよ

うに技術的な面で共通する点が多く、外見上は極めて類似している物質文明の場合でも、その社会的機能では、大きく異なる場合が少なくない。

仏教のような精神活動を中心とした宗教では、個人的にみれば共通するところが多くても、社会的な機能などでは、異なる場合が多い。それゆえ、比較文化の研究は、整理された研究成果の比較研究ではなく、それぞれの原典に基づき、生活実態と合わせて考えるなど、それぞれの文化の原点に立ち返って、比較する必要がある。また、国際社会が密接な関係になればなるほど、それぞれの文化の共通性だけに目を奪われず、文化の基本である価値観の相違点にも、一層慎重な配慮が必要になってくるものと思われる。今までは、仏教の共通した面にスポットが当てられてきたが、今後は仏教の社会的機能などに視野を拡げるとともに、その民族や国家での基本的な考え方や行動の原理など価値観での相違にも目を向ける必要性があるのではなからうか。さらにいえば、文化を異にした国家や民族のもつ相違した価値観に対して、理解と敬意を払うことによって、新しい友好関係が生まれる

ものと期待している。

(いのうえ ひでお・樟蔭女子短期大学教授、東北大学名誉教授)